

蕭瑀の家系を遡る

櫻田 芳樹*

Study on the family line of Xiao Yu (蕭瑀)

Yoshiki Sakurada *

Received November 30, 2006

Abstract

“Nine prime minister in a family line—Xiao Yu’s Lineage” is based on “Tang shu (新唐書)/ Prime minister table” and says that his family line began at Xiao He (蕭何) who helped Liu Bang (劉邦) to establish the Han dynasty. When his ancestor Xiao Daocheng (蕭道成) established the Qi (齊) dynasty, his great grandchild Xiao Zixian (蕭子顯) wrote his “History of South Qi” (南齊書). There’s a possibility he added fictional details to embellish his family line. I investigate these historical facts and suggest that he added fictional details, but there’s also some facts in these family lineage. At least Xiao Yu family believed these familyline and respected Xiao He and Xiao Wangzhi (蕭望之).

I はじめに

中国歴代名門世家叢書の一冊に『一門九相 蕭瑀世家』(曹書傑著)^①という書があり、かなりの歴史好きでもそう気づいていないだろう驚きの指摘がある。この書名が語る情報は、隋の煬帝の後、蕭皇后の弟蕭瑀の一族は唐代300年に九人の宰相を輩出したということで、この指摘自体、唐代史の門外漢にはかなりの驚きであろう。私自身、一向に意識していない事であった。

しかし、これだけではない。この蕭瑀の家系を真っ直ぐ上にたどると、六朝梁の武帝蕭衍に遡り、中国封建王朝の典型を形成した漢王朝創設の第一の功労者、蕭何に始まるというのだ。つまりは、蕭何の家系は唐代を越えて唐末五代まで続き、六朝には王室を創建し、以後代々宰相を輩出し続けたというのである。

聞いたことのない指摘に、本当だろうかというのが当初の感想であり、この書を恵贈してくれた著者に確めもした。しかし、後漢書以後の通読も精読も欠いた私にはそもそも判断の基盤

* 教育能力開発センター
Center of Development for Education

がなかった。ただ、この書の著者も、この叢書に唐代を代表する世家を選ぶ過程でこの事実に気づいていった事を、その序文に記している。あらためて史書をたどり、蕭何の家系と言われるものを確認してみようと思ったわけである。

題目に掲げた「蕭瑀の家系を遡る」ことは、一応はこの書を読めば足りるはずで、その巻末には蕭何に始まり、蕭遼、蕭頃、蕭愿に至る世系表が示されており、「蕭氏大事年表」が付録され、宋の桓公に蕭邑に封じられた蕭氏の起こり、蕭叔大心（BC 681年）から、五代後唐の蕭頃死（AC 930年）までが整理されている。しかし、この世系表が事実であるかどうかは、本文の記述のみではわからない。その叙述には、当然重点の置き方、繁簡があり、本当にこの家系が一系につながるのかどうか確かめようとする者にとって、著者の挙げる史料に添ってそれを点検してみなければならない。

その結果わかったことは、最初にこの家系が漢の蕭何につながる事を言ったのは、『南齊書』「本紀第一 高祖上」であり、これは齊の高帝蕭道成の曾孫、梁の蕭子頊によって記されたものである。『梁書』もこれを踏襲し、『新唐書』「宰相世系表」が更に蕭何の遠祖にわたって記述しているということである。

以下私は叙述されない重要ではない人物を含めて、世系表の中でどうつながっていったのか、本当にこの家系が一筋に連なっていくものかどうかを確認し、また、著者が事実に語らせようとした蕭氏の伝世の秘訣に耳傾けて、私の読書報告を記してみたい。

II 蕭氏の遠祖

漢の蕭何といえ、著者は「蕭何月下に韓信を追う」という京劇の演目、「成るもまた蕭何、敗るもまた蕭何」という諺で、中国では子供まで誰知らぬ者のない人物と言う。日本でも、『史記』を読み、楚漢の興亡、項羽と劉邦に関心を持つ程の人には広く知られた人物である。

曹書傑氏は、その蕭氏の姓の由来を、南宮万を討って宋の桓公を擁立した功で、蕭邑（今の安徽蕭県）に封じられた蕭叔大心に置いている。この蕭邑に百年続いた蕭国は、魯の宣公十二年（BC 597年）楚に亡ぼされ、その子孫は逃亡した。その後裔「不疑」なる者が「楚の春申君の上客となり、世々豊、沛の間に居た」というのが、蕭何に至る家系であるという。この記述の基礎として、本書の第一章の注釈に『左伝』、『風俗通』、『通志・氏族略』、『新唐書・宰相世系表』の四つの書名および篇名をあげている、それをたよりに検索を進めると次の事実が確かめられる。

唐代の宰相の家系を辿ったのが、『新唐書・宰相世系表』で、これが初めて蕭氏を遠祖まで遡って、蕭瑀以下の唐の宰相の系譜を示している。言わば蕭何の家系が梁の武帝蕭衍、『文選』の編纂者蕭統を経て、一筋に蕭瑀に連なる家系であることは、ここに記されていた。又、それから遡って『南齊書』、『梁書』にもすでに同様の系譜は示されている。著者が『新唐書・宰相世系表』を出典として注記したのは、蕭瑀からこれを遡ったためであろう。

蕭氏は姫姓より出づ、帝嚳の後なり。商帝乙の庶子微子、周封じて宋公と為し、弟の仲衍八世の孫戴公子の衍を生む、字は楽父、裔孫大心南宮長万を平らげて功有り、蕭に封ぜられ、以って付庸と為る、今の徐州の蕭県是なり、子孫因って以って氏と為す。其の

後、楚蕭を滅ぼし、裔孫不疑楚の相春申君の上客と為り、世よ豊沛に居る。漢の丞相鄼文終侯何、二子あり、遺と則なり^②。

この部分の記述は沛に起った蕭何の遠祖を遡ったもので、蕭何の出身地沛の蕭氏とは何かを探り、楚の春申君の上客となった蕭不疑に至り、更にその出自を探って蕭叔大心に至る。蕭叔大心については『春秋左氏伝』及び、杜預の『集解』に確認できる。

(魯 莊公十二年) 伝 十二年秋，宋万弑閔公子蒙沢。一中略一群公子奔蕭，公子御説奔亳。一中略一 冬十月，蕭叔大心及戴武宣穆莊之族，以曹師伐之，殺南宮牛于師。殺子游于宋，立桓公。 [[集解] 蕭，宋邑，今沛国蕭県。蕭叔，蕭大夫名。]

(魯 宣公十二年) 経 冬十有二月，戊寅，楚子滅蕭。 [[集解] 蕭，宋付庸国]

蕭氏，子姓。杜預曰，古之蕭国也。其地即徐州蕭県是也。後為宋所并，微子之支孫大心，平南宮長万有功，封於蕭以為付庸。宣十二年楚滅之。子孫因以為氏，世居豊沛之間。裔孫不疑為楚相春申君客，漢有丞相鄼文終侯何。六代孫望之御史大夫。又齊武帝以巴東王子響叛，改姓蛸氏。(宋・鄭樵『通志』卷二十六 氏族略二 以国為氏)

これによって、蕭氏の氏名の起りが蕭叔大心に始まるという『新唐書』の記述、『通志』の記述が『春秋左氏伝』とその杜預の注釈に確認される。

この世系表では蕭何以下はその子から孫、曾孫と直系をたどることが出来るが、その上は直接これをたどれるわけではなく、蕭氏の起こりの蕭叔大心と、その系統が豊・沛の地に居た理由を示している。つまりは『春秋左氏伝』とそれにつけた杜預の『集解』によって、蕭何の遠祖を示したのである。この蕭叔大心の遠祖が宋公の弟、仲衍であれば、それは『新唐書』のように、伝説時代の五帝帝嚳まで、遡らせることもできる。『通志』「氏族略二」は、それぞれの氏族名の起源を分類したもので、「国をもって氏とする」条に置かれた記述であるから、更にその遠祖には及ばず、その後裔に蕭望之があり、齊の武帝の子巴東王蕭子響が叛乱によって、同音の蛸氏に変えられたことに触れる。

『新唐書』『通志』の共にいう春申君の上客蕭不疑については、『春秋』の経伝及び『史記』には出てこないのが、この記述が何に基づいているのかは、今は確かめられない。ただ、『元和姓纂』（中華書局版）の巻五「蕭」には同様のことを言って、蕭叔大心の子孫が功有って、邑に因って氏としたと言って、大心のことに触れている。これは蕭叔大心の功を子孫の功としたり、蕭氏の起こりを邑名としたり、左伝に照らして記述に微妙なずれを生じている。岑仲勉の校正では洪瑩が『秘笈新書』によって補ったものとする。またこの条に関連して「巻五整理記」に、秦嘉謨輯補『世本』を引いて、蕭氏の起こりを、宋楽叔が南宮万を討ったことに置いている。ここにも不疑のことが出ていないわけではないが、『春秋』、『史記』に確かめられないとすれば、世本の旧本のこの条の続きなどに確かめられたことであつたらう^③。ちなみに『通志』「氏族略・氏族序」には「凡そ姓氏を言う者は、皆世本・公子譜の二書に本づく。二書は左氏伝に本づく。」と言っている。

『風俗通』が注釈に示されているのは、敢えて現行本に関連をたどれば、次の二条を指すで

あろう。

易伝，礼記，春秋，国語，太史公記黄帝，顓頊，帝嚳，帝堯，帝舜是五帝也。

(『風俗通義』卷一「皇覇・五帝」)

春秋説斉桓，晋文，晋繆，宋襄，楚莊五伯也。

(漢・応邵『風俗通義』卷一「皇覇・五伯」)

これは引用していない説明部分を含めて，帝嚳，宋の襄公について補足するものであり，これによって更に蕭叔大心の遠祖をたどる資料が示されているが，『新唐書』の莊重な遠祖の記載には役立っても，蕭叔大心以下の流れを説明する所はない。

Ⅲ 漢代蕭望之に至る蕭何の後裔

『一門九相 蕭瑀世家』の付録一「蕭氏世系表」は蕭望之までの系譜を次のように示している。

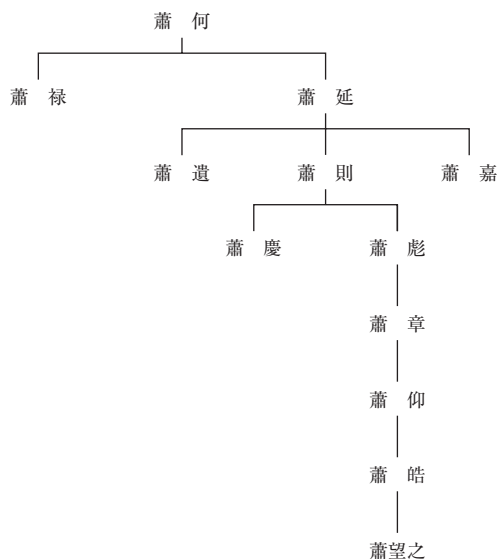


図1

これは曾孫の蕭慶までは，『史記』『漢書』の記述に確められる。それによって『新唐書』「宰相世系表」に言う蕭何の二子，遺と則とは孫であり，『新唐書』に見えない二子蕭祿，蕭延，又則の弟蕭嘉，蕭則の子蕭慶を加えることができる。

司馬遷は蕭何の子孫について「蕭何世家」では「後嗣以罪失侯者四世絶。天子輒復何後，封鄴侯。功臣莫得比焉。」とのみ言って，その四代及び五代が誰であるか，ここには言及していないが，「高祖功臣侯者年表」には鄴侯を継いだ者，侯に封じられた者の名が記されている^④。

それによれば、蕭何の子は祿、同、延の三人ということになるが、『漢書』「蕭何・曹參世家」では同を蕭何の夫人としている⁵。蕭祿の死後、蕭延が幼かったためか、蕭何夫人同に酈侯を嗣がせ、後その異例を戻して小子蕭延に酈侯を嗣がせたということである。それ以外は記述の精粗の差はあっても、この表には省かれている罪によって廃絶された蕭嘉の子蕭勝、蕭慶の子蕭寿成を含めて、『史記』、『漢書』の記載は一致している。『史記』「高祖功臣年表」にはそれ以降の記述はない。ただ、「建元以来侯者年表 第八」に玄孫の蕭建世が酈侯に封じられたことが追記されるから、これら玄孫までの記述が『史記』、『漢書』に共通して確められることである。

宰相の一步手前までいった蕭望之については「漢興以来将相名臣年表」には、神爵三年(BC 59)に「御史大夫望之」、黄竜元年(BC 49)に「太子大傅蕭望之為前將軍」と名は見えるが、蕭何の後裔とは確認されない。蕭望之の伝を立てている『漢書』も、「蕭望之、字は長倩、東海蘭陵の人なり。杜陵に徙る。家は世よ田を以て業と為す。」と言って、それが蕭何に連なる家系とは意識していない。この表の蕭彪以下、蕭望之に至るまでは、『新唐書』「宰相世系表」によって作成されており、『漢書』にはそれを確認出来ないし、『漢書』の蕭寿成以下の記述も蕭望之につながっていくようには、記述されていない。

宣帝の時、更に蕭相国の後裔を求めて、玄孫の建世等十二人を得て、建世を戸二千戸、酈侯に封じ、孫の獲に伝えたが、獲は奴婢を使った殺人事件に坐して、死一等を減じられたという。次に成帝の時、又玄孫の子、南繡県長の喜を酈侯に封じ、子より曾孫に伝えたが、王莽が敗れて、絶えたという⁶。すると同時代史料『史記』、『漢書』による蕭何世系表は次のようになる。「蕭曹世家」に名の見えない者は「高惠高后文功臣表 第四」によって補っておく。

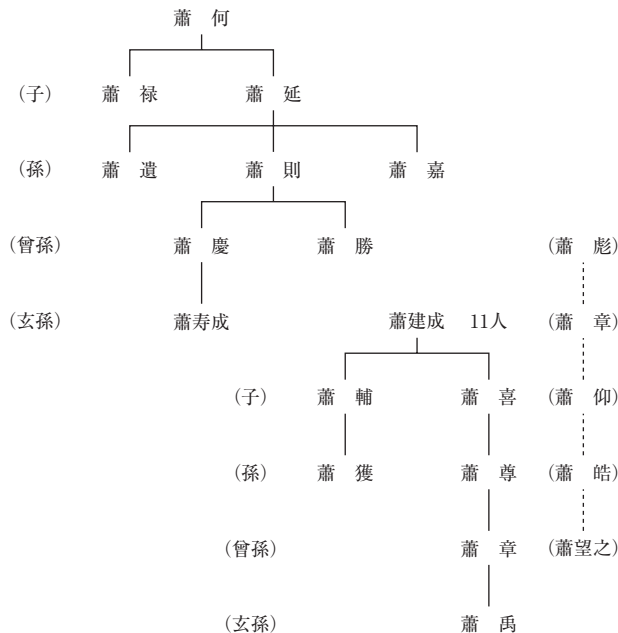


図2

ところが、『新唐書』は蕭遺、蕭則を蕭何の二子とした上で、次のように系譜をつなげていく。(括弧に入れて付記した)

則生彪，字伯文，諫議大夫，侍中，以事始徙蘭陵丞県。生章，公府掾。章生仰，字惠高，生皓。皓生望之，御史大夫，徙杜陵。
(『新唐書』「宰相世系表」)

『一門九相 蕭瑀世家』の第一章「千年の遠き祖先の耀きを伝える」は次の四節に分けて叙述される。「一 蕭邑に封じられて世々豊沛に居る，二 漢家第一の相蕭何，三 家園を蘭陵に徙した蕭氏，四 帝業を創建して蕭齊を建国する」。このうち，第三節「家園を蘭陵に徙した蕭氏」が蕭彪以下蕭望之に至る記述であり，その注釈に示される出典は『新唐書・宰相世系表』と『漢書』の「蕭望之伝」である。『新唐書』「宰相世系表」の記述は，『史記』，『漢書』を参照していない事は，先に見てきたところから明白である。とすると，歐陽修は宰相蕭氏の世系を記述するに当り，『史記』，『漢書』に史料を求めてこれを記述する方法を取ったのではなく，宋朝に伝来した族譜に依拠してこれを記したのであろう。そこに蕭望之までの記述が『史記』『漢書』と齟齬する原因がある。蕭望之を蕭何につなげる譜系については，『漢書』に注をつけた唐の顔師古に批判が示されている。

師古曰く，近代の譜牒，妄りに相い託付す。乃ち望之は蕭何の後と云い，昭穆を追次す。流俗の学者は，共にこれを祖述す。但鄼侯は漢室の宗臣にして，功高く，位重し。子孫の胤緒具に表伝に詳し。長情は鉅儒達学にして，名節並びに隆し。古今を博覧して，能く其の祖を言う。市朝未だ変らず，年載遥かなるにあらず，長老の伝うる所，耳目相相接す。若し其れ実に何の後を承けしならば，史伝寧んぞ詳ならざるを得んや。漢書既に叙論せず，後人焉にか信を取る所あらん。然らざるの事，断じて識るべし^⑦。

ここで蕭彪以下蕭望之までを，先に示した『史記』，『漢書』による世系表の中に置いていくと，蕭望之は最後に鄼侯として名の伝わる南嶽県長の蕭喜の孫蕭章の同世代ということになる。班固は蕭喜の曾孫蕭禹まで鄼侯が継承されたことを言い，一方蕭望之を列伝に立てていることからすれば，蕭彪以下蕭望之までを直線で蕭則に連なる家系とするのは史実として無理がある。『新唐書』の言う通り，蕭彪が蕭何の曾孫だとすれば，蕭章は蕭建世以外の十一人の玄孫の一人となり（しかも，蕭建世の曾孫に同名の蕭章が居る），その曾孫が蕭望之だと言うことになるのだ。班固は蕭喜の曾孫まで鄼侯を継いだことを述べているからには，蕭望之がその一世代前なら，それに言及しないはずはない。

宋の鄭樵『通志』「氏族略第一・氏族序」には，隋唐以前には，歴代，凶譜局が置かれ，百官族姓の家状は秘閣に蔵されたことを言い，唐の太宗は諸儒に命じて『氏族志』一百巻を撰せしめたことを言う^⑧。宰相の家柄，太宗と蕭瑀の関係を考えても，宰相蕭瑀の家に伝わった族譜は早く唐室にも収められていたろうから，『新唐書』はこうした官の秘閣に伝来したものによって，これを記載したと思われる。つまり蕭瑀の家系が蕭何に一系に連なるというのは，唐の宰相としての蕭瑀一家の意識であった。その意識は，自らの家系は蘭陵の蕭氏であり，それは蕭何の血筋が事によって蘭陵に移ってきたことに始まるというものであったろう。『新

唐書』の記載する蕭彪が諫議大夫、侍中であったことは『史記』、『漢書』に確められない以上、この事を蕭何の孫の時代の事とも、曾孫の時代の事ともできないが、そういう人物の存在が蘭陵の蕭氏には伝承されてきたのであろう。この意識が蘭陵の蕭氏に萌すのは何時のことか、或いは何時頃族譜の莊嚴化のために仮構されるのか、蘭陵の蕭氏として史伝に立てられた蕭望之より後、蕭瑀までのどの時代かであろう。

蕭瑀の家系を遡って、史実として齊、梁二王朝の創始者、蕭道成、蕭衍をたどり得るが、この二人の祖、西晋の淮南令蕭整は、南渡後晋陵の武進にいて、ここを南蘭陵とした。これら南蘭陵の蕭氏に意識され、伝承されたのが、蕭彪から蕭皓に至る直線であり、『南齊書』、『梁書』は小異はあっても、『新唐書』の描いた系譜を示している。つまり、齊、梁両王朝の蕭氏には蘭陵の蕭氏が、蕭何の直系であると意識されていた。

「太祖高皇帝諱道成，字紹伯，姓蕭氏，小諱闔將，漢相國蕭何二十四世孫也。何子鄼定侯延生侍中彪，彪生公府掾章，章生皓，皓生仰，仰生蕭望之，」

『南齊書』「本紀一・高祖上」

「高祖武皇帝，諱衍，字叔達，小字練兒，南蘭陵中都里人，漢相國何之後也。何生鄼定侯延，延生侍中彪，彪生公府掾章，章生皓，皓生仰，仰生蕭望之，」

『梁書』「本紀第一・武帝上」

『南齊書』、『梁書』の記述は、蕭彪を蕭延の子としている点が後の『新唐書』と違っている。又、それ以後蕭望之の父親と祖父が『新唐書』とは逆であり、小異が見られる。この族譜のたどり方が、唐代までのいずれかの時点で、蕭彪を蕭則の弟から蕭則の子とする書き換え、又蕭皓と蕭仰の入れ替えが起ったのであろう。いずれにしても、『史記』、『漢書』に照らして、史実として見れば、蕭彪が蕭何のどの筋に繋がるか、少なくとも不明の点線で表示されるべきものであった。南蘭陵の蕭氏の伝承にある蕭何の一系につながるという意識は、これを潤色、仮構と見れば、齊王朝を創建した蕭氏にとって、中国封建制の祖形をつくった漢王朝の蕭何につながる以上の莊嚴化はない。蕭彪を蕭延の子とするのも、蕭則の子とするのも、『史記』、『漢書』がこの世代まではっきりとした系譜を示しながら、ともに蕭彪の名を上げない以上、顔師古の見方はゆるがない。この意味で『一門九相 蕭瑀世家』の蕭瑀の家系を一系として漢の蕭何につながるの誤りである。

ただ最初にこの潤色を行なった者には、その仮構であることは事実としても、歴代これが伝えられていけば、それはいつの間にか事実同様の重みを持つようになる。ここで私は、史実としては潤色、仮構とせざるを得ない蕭彪以下蕭望之までを点線でつないで、蕭何の家系の下に置いておきたい。それは、蕭望之の出自が単なる農家の出とは考えにくいこと、つまりこの潤色、仮構を許す余地が蕭望之の出自に考えられるからである。また、『新唐書』の記述が蕭瑀一族の族譜によるものだとしても、それは五代前の蕭道成の時代には形成されていた。言い換えれば、南蘭陵の蕭氏の伝承又は仮構は、代々伝えられて、唐代にはすでに、彼等の描いた蕭氏の精神的遺伝子の伝承になっていると思うからである。

蕭望之の系譜を考えてみる時、「家は世よ田を以て業と為し、望之に至りて学を好み、齊詩を治め、同県の後倉且に業うること十年。令を以て太常に詣り業を受く。復た同学の博士

白奇に事う。又夏侯勝に従って論語礼服を問う。諸儒焉を称述す。」という記述は、この家が蕭望之の学習意欲を目覚めさせ、それを十年に渡って継続を許す程の家であったことを意味しよう。そんな家柄として、高祖の代に罪をえて蘭陵に至り、太祖の時には公府の掾と地方の下役となり、祖父の代からは農業專業になったという家柄はごくありそうなことに見える。蕭彪を蕭何の家系に一筋につなぐのは潤色であるが、南蘭陵の蕭氏のこうした伝承まで、それが正史に確められないからといって抹消できないであろう。点線を蕭何の家系の下に置いておくのはその意味である。『漢書』が王莽の時に絶えると言っているのは、酈侯の家柄としての蕭氏であり、蕭建世以外の十一人の流れはたどられていないし、蕭何の「子孫昆弟の兵に堪える者」^⑨として劉邦に仕えた他の系統も続いたものがあるはずである。そうした蓋然性を残すことは、南蘭陵の蕭氏の伝承を、生物学的にはともかく、その精神的遺伝子の継承を示すものとして残すことでもある。『南齊書』が早くも齊の武帝の一族蕭子頤によって記されている以上、蕭何が一族の祖であるということは、蕭瑀にはすでに五代に渡って語り伝えられてきたことであり、少なくとも精神的遺伝子として伝わっていたと言う程の意味を読み取ることは出来よう。

『新唐書』欧陽脩、『通志』鄭樵が宋代になって、顔師古の立場を取って、齊王朝の描いた系譜を抹消してしまわないのは、単なる粗漏にのみよるとは思えない。唐朝の一応の検証をへた族譜が宋代に伝承され、それによって蕭氏の世系を記述する時、顔師古の注釈を失念していたとは考えにくい。族譜というものを考えて見るとき、正史の列伝に載るほどの人はごく稀なことであり、族譜の伝承を正史に見えないからといって抹消していい根拠にはなり得ない。とすれば、蕭望之について蕭何につなげるのは付託であるとし、それを『漢書』の記述に確められるのなどはごく例外的なことなのではないか。蕭彪を蕭何の家系から切り離れた上で、蘭陵の蕭氏に伝承していた個々の人物の誰を消し、誰を残すか、実証的にはどう処理のしようもないであろう。顔師古の批判は批判のままに、秘閣の族譜のままこれを記述しておく、という立場がありうるように思う。従ってこういう系譜は蕭瑀一族の意識の中では誇りとなっていたであろうし、少なくとも精神的遺伝子の継承というべき物は確実に存在したであろうと思われる。

IV 蕭望之以後の後裔

蕭望之には八人の子があったが、『漢書』「蕭望之伝」には関内侯を継いだ長子蕭伋と、大官に至った蕭育、蕭咸、蕭由の名のみ記載している。「蕭望之伝」に伝が付載されているのは、大官に至った蕭育、蕭咸、蕭由三名のみである。蕭望之以下南渡以前の蕭氏は『新唐書』「宰相世系表」には次のように記されている。

皓生望之，御史大夫，徙杜陵。生育，光禄大夫。生紹，御史中丞，復還蘭陵。生閔，光禄勳。閔生闡，濟陰太守。闡生冰，吳郡太守。冰生苞，後漢中山相。苞生周，博士。周生嶠，虢丘長。嶠生達，州從事。達生休，孝廉。休生豹，広陵郡丞。豹生裔，太中大夫。

これを『南齊書』「本紀 第一・高帝上」の書き出しに照らして見ると、蕭望之が杜陵に徙り、蕭紹が蘭陵に戻ったという記述が欠けていることと、吳郡太守の名を氷としていること以

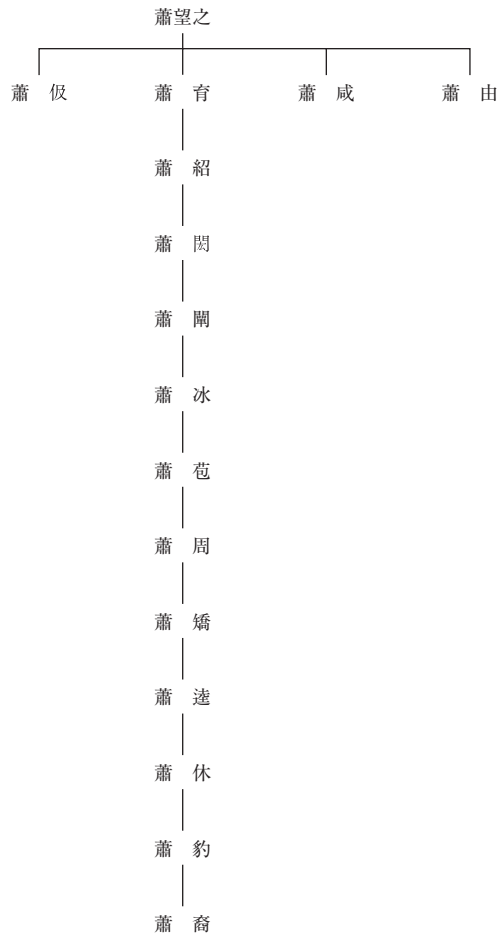


図 3

外、内容に違いはない。これらを『一門九相 蕭瑀世家』では次のように表示している。

ここで族譜というものとどう向き合うのかという問題に直面せざるを得ない。この後南渡して、南蘭陵の蕭氏を名乗る蕭整に至り、その子蕭俊の家系に齊の武帝蕭道成が、蕭鎰の家系に梁の武帝蕭衍が現れ、これ以後は隋唐に至るまで、途切れることなく世系が正史に確認される。これ以下の系譜が一系であることは紛れもない。すると、南蘭梁の蕭氏に齊朝創建の人物が出、しかも、蕭道成の曾孫、蕭子顯が『南齊書』を記した時、蘭梁の名望家蕭望之にこれをつなげ、蕭望之を更に蕭何につなげる潤色を施したのではないかという推測が成り立つ。

断代史『南齊書』『梁書』とは別に、南朝宋、齊、梁、陳を通観した『南史』（唐・李延寿）の立場がこれで、『南齊書』『梁書』『新唐書』のこれまでの記述を全て削って、その「齊本紀」「梁本紀」は南渡後の蕭整から記述を始めている。これは『南史』が『宋書』『南齊書』『梁書』『陳書』を前提に置き、ワン・クッション置いた為に取り得た態度であった。宋・司馬光『資治通鑑考異』は、顔師古、李延寿の見方を継ぐもので、おそらく齊の高帝蕭道成の出自を語っ

てその遠祖に触れない現代の史学者の見方もこれであろう。

蕭道成族弟蕭順之〔考異〕齊高帝紀，姚思廉梁書武帝紀，自相國何至皇考一十余世，皆有名及官位，蓋史官付会，今所不取。 (『資治通鑑考異』卷第六「宋・順皇帝」)

ただ、四部備用本は武英殿版を底本として、「南齊書考證」を付けているが、「齊高帝紀」にこれを引き、蕭何にこれをつなげる事の非を確認しながら、小さな留保をしている。

〔高帝本紀上漢相國蕭何二十四世孫也○臣宗万按通鑑考異曰，自相國何至皇考一十余世，皆有名及官位，蓋史官付会。又按漢書蕭望之伝，不叙世譜。此以為何後，恐未確當。然伝云望之東海蘭陵人。即此可知帝之苗裔，亦未必皆妄矣。〕 (『南齊書卷一考證』)

司馬光の『資治通鑑考異』は、「一十余世」といって二十四世全部を否定したわけではないが、多分、『南史』と同じく、この表示の蕭裔より前の事を言うのであろう。「南齊書卷一考證」はこれを全てが仮構ではないだろうとしている。その理由が、蕭望之が東海蘭梁の人と言うのでは、これは逆に付会の理由ともなり得て、論理的説得性はないが、全てが付会ではないだろうという感触についてはこれを認めてよいと思う。何故なら、蕭何より一十余世の名と官位は史官の付会であるという『資治通鑑考異』の大きな立場は認めながら、その付会とされるものの中には、その付会以前に南蘭陵の蕭氏に事実として伝承されてきたものがあると思うからである。

正史に伝を立てられる人物など途切れなく続くはずはないとすれば、この系譜が事実かどうか検証する史料は、本々ありえないのである。蕭由の時代が漢の哀帝の時であるから、さしあたり『漢書』『後漢書』『三国志』と人名索引をくって、その関連が確められないからといって、蕭望之の系統を蕭何の直系からはずしたようなことがここでも出来るわけではない。もともと『漢書』には、蕭望之に八人の子があったことをいうが、まず家を継いだ蕭伋の名と、大官に至った蕭育、蕭咸、蕭由の三人の伝が付設されるのみで、他の四子の名は見えないし、「蕭望之伝」に言う、「都合、蕭氏の一族には官吏として二千石に至った者が六、七人いた」^⑩、という記述もこれ以上には確められないのである。その始まりがこうであれば、その先が正史に関連を見出せないからといって、これを直ちに仮構とか潤色と言って抹消することもできない。

『新唐書』「宰相世系表」はこの後に、蕭苞の九世の孫蕭卓、字は子略、洮陽の令の娘が宋の高祖劉裕の継母であり、この系統を皇舅房とし、齊、梁の王朝を立てた蕭氏を齊梁房とする。つまり、この後の蕭整から以下を史実とすれば、その史実から上へ伸びてくる蔓がある。こういう点から見て、この系譜には蕭氏一族の伝承があつて、ゼロの上に立てた仮構で書かれているわけではない。とすれば、蕭望之を蕭何に一系につなぐのはともかく、唐朝の秘閣を通じて伝承され、それなりの考定詳実をへたとされる族譜がある以上、歐陽修がこれによって「宰相世系表」記載するのは一つの態度であつたと思う。

V 「近代の譜牒」と正史の書きぶり

『一門九相 蕭瑀世家』の序文は『新唐書』「蕭瑀列伝」の賛を示すことから始められている。それには蕭瑀の家系を直系の梁の蕭衍から説き起こすが、蕭氏が漢に起るとも、蕭何に始まるとも言わない。

「賛に曰く、梁の蕭氏江左に興り、実に功民に在り、厥の終りや大悪無く、浸微を以て亡ぶ、ゆえに祉と其の後裔を余す。(蕭)瑀より(蕭)遘に逮ぶまで、凡そ八叶の宰相、名徳相い望み、唐と盛衰す。世家の盛んなること、古より未だ有らざるなり。」

—『新唐書』「蕭瑀列伝」^①

同じ『新唐書』が「宰相世系表」では遠祖から蕭何を記述し、「蕭瑀列伝」では梁の蕭氏を記述する違いがある。『新唐書』にはそれぞれの巻に撰者の署名があり、「宰相世系表」には歐陽修の、「蕭瑀列伝」には宋祁の署名がある^②。しかしこれは二人の見方の違いというよりは、王朝の系譜を記すと、個別の史実を記すとの書きぶりの違いを示すのではないか。

曹操の同時代から漢代に系譜をたどりうる『晋書』は除いて、南朝の、宋、齊、梁、陳、北地に興り、南北を統一した隋まで、いずれも漢代に系譜をつなげないものはない。齊の時にすでに王室の一員であった梁の蕭衍を除いて、いずれも下級軍人として成り上がってきた諸王朝がいずれも漢代につながる系譜を記しているのである。齊、梁はすでに示したから宋、陳を書き抜けば、下の通りである。

高祖武皇帝、諱裕，字德興，小名寄奴，彭城県綏里人。漢高帝弟楚元王交之後也。

(『宋書』「本紀第一 武帝上」梁，沈約撰)

高祖武皇帝、諱霸先，字興国，小字法生，吳興趙城下若里人。漢太丘長陳寔之後也。

(『陳書』「本紀第一 高祖上」唐，姚思廉撰)

『通志』「氏族略・氏族序」^③に言うように、結婚であれ、任官であれ、いずれも族譜を見て進められたのであれば、一般に寒門の出身者が王朝を創建した際、それらしい系譜を欲するのは当然のことである。それ以上に王朝の創建にとって必要なことは、禪讓の正統性を飾らねばならないと言う事情もあった。その為、一方は何と漢の王室につなげ、一方は葬儀に三万余人が集まったという名望家につなげている。これが俄に信じられないのは論をまたないであろう。

また、魏徵の記した『隋書』「帝紀第一 高祖上」には、隋の楊堅は漢の大尉楊震の八代の孫とされ、誕生にまつわる帝王伝説に類する記事、紫の気が庭に満ちたとか、体中に鱗があったとか、頭に角が生えていたとかが記されている。こういう族譜なり、伝承は同時代に発生したとしても、それが記されたのは一時代後のことである。これに批判的な目を向ければ、顔師古同様「近代の譜牒、妄りに相い託付す」というぐらいのことは当然見えていたはずである。ただ秘閣に伝承された族譜があり、伝承された逸話があれば、その伝承のままにこれを記すが、正史の系譜なり伝承なりに対する態度、書きぶりであったのであろう。『南史』が見えていたことを見えていたままに記しえたのは、先に断代史があったからであろう。これを現代の

歴史の実証の立場から見れば、直ちに仮構、潤色と判断すべきもので、歴史家は一般向け著述に議論の必要も認めずに、これを否定している。

「隋の文帝楊堅は、その家系を遠く漢代の名望家の大臣、楊震にまで遡らせているが、これはもちろん信用出来ない。」宮崎市定著『隋の煬帝』^⑬

この後、著者はその父親の経歴から、楊堅の出自を論じており、この態度は魏晋南北朝の時代史を論ずる史学者に共通のものである。例えば、近年の中国史シリーズ魏晋南北朝篇でも、齊の蕭道成、梁の蕭衍の出自を語る時、『南齊書』の掲げる系譜など、問題にもせず、蕭道成の北部戦線での台頭から語り始める。

「四百五十年の北魏による侵攻以降、宋の国力は衰退の一途をたどり、明帝の時代になると淮水以北から山東半島にいたる領土を完全に北魏に奪われることとなる。のちに宋王朝を滅ぼすこととなる南齊の建国者蕭道成（齊の高帝）は、この北部戦線で実力を築いた軍閥であった。

彼は本来の出身地とは異なる晋陵武進（現在の江蘇省常州市）の地に土断により設置された南蘭陵（蘭陵はもと山東省嶧県）の人である。対北魏防衛の拠点である淮陰（江蘇省）の軍閥として実力を蓄え、やがて中央に召されて軍政を担当することになった。そして宋の末、皇族の江州刺史桂陽王劉休範や荊州刺史沈攸之などの挙兵を平定したのち、衰弱した宋を滅ぼして齊を建国したのである。」

「蕭衍は南蘭陵（現在の江蘇省常州市）の人で、南齊蕭氏の一族であり、父の蕭順之は南齊の建国者である蕭道成の族弟で、南齊創業の功臣でもあった。蕭衍はこうした環境に育ち、早くから文武両道にわたる教養と才幹で将来を嘱望され、南齊の王族の知識人として史上有名な竟陵王蕭子良の「八友」の一人として数えられる。儒学・老莊の思想・仏教学に対して深い学識を持った教養人であった。—中略—

蕭衍の家柄は先に見たように南齊の蕭氏につながる家柄であり、南齊朝における貴族の家柄であった。ただし、その南齊の蕭氏自体は、蕭道成が武人として南齊を興したために貴族の仲間入りができた一族であり、その意味で南蘭陵の蕭氏とは、貴族は貴族でも「成り上がり」貴族という性格の違いを持っていた。」^⑭

これを見ると、『南齊書』に記された系譜などに言及せず、その出自が成り上がりであることの指摘があるのみである。言わば信用できないことについては触れないという態度であろう。すると、今まで私が大真面目に論じてきたことなど、烏滸の沙汰めいてくるが、一方に『新唐書』「宰相世系表」の真偽をにわかに判断する基盤を欠いていた以上、これらは私にとって、必要な復習であった。その復習によって見えてきたことは、正史『宋書』『南齊書』『梁書』『陳書』の系譜とは、ひとまず前代の族譜をそのまま記述したものであり、それは現在の目から見ればいかにも怪しげな帝王伝説を伝承のままに記しておくことと同一の態度であった。『南史』のように、些か史眼をきかせた判断を持ち込んだ記述は、それら断代史の存在を前提したから書きえた例外であった。

ここで司馬氏の系譜を記した『晋書』を見ると、それは伝説時代の帝高陽から記述されている。『新唐書』「宰相世系表」の蕭氏が帝嚳から記述されるのは、蕭子顯が蕭何につなげた系譜を、唐代までに司馬氏の系譜のように古代から続く一族として描き出していたことを意味しよう。蕭氏の欲していた族譜がついに唐代に至って完成したことが、見て取れる。

「宣皇帝諱懿，字仲達，河内温県孝敬里人。姓司馬氏，其先出自帝高陽之子重黎，為夏官祝融，歷唐虞夏商，世序其職。及周以夏官為司馬。其後程伯休父，周宣王時，以世官克平徐方，錫以官族。因而為氏。楚漢間，司馬邛為趙將，與諸侯伐秦，秦亡。立為殷王，都河内，漢以其地為郡。子孫遂家焉。自邛八世，生征西將軍鈞，字叔平。鈞生豫章太守量，字公度。量生潁川太守儁，字元異。儁生京兆尹防，字建公。帝即防之第二子也。」

（『晋書』「帝紀第一 宣帝」唐太宗御撰）

司馬氏の系譜は確実に漢代に遡らせることが出来るが、その出自を語る史学者の口ぶりがはっきりするのは、後漢からである。

「司馬懿の家柄は、秦の滅亡後に項羽や劉邦とともに活躍した殷王司馬邛の子孫と称し、後漢時代にはすでに代々郡の長官を輩出する名族であった。」^⑤

この司馬氏の族譜とて、蕭氏の蕭何に当る司馬邛については、「称し」という言葉使いをして、必ずしも事実と認定していない。まして他の南朝諸朝がその起こりを漢につなげるのは、「近代の譜牒」の「託付」であった。正史の王朝の系譜の示し方は、伝承を伝承のままに記すという書き方であって、ここには顔師古の批判の方法は用いられないのがその共通の書きぶりであった。従って蕭整以前の『新唐書』「宰相世系表」は唐代の蕭氏の記憶の中の系譜と限定すべきであった。

結局、『新唐書』「宰相世系表」によって作成された『一門九相 蕭瑀世家』の「蕭氏世系表」は、『史記』『漢書』にたどられる蕭何と蕭望之の鳥と齊梁房とされる蕭整以下の三つの鳥が一つにつながれた系譜であった。蕭何の鳥と蕭望之の鳥は明らかに切れている。また、蕭育の子蕭紹以下、蕭整までは真偽の検証のしようがない。おそらく『南齊書』の撰者蕭子顯の潤色、仮構であろうと思うが、後の部分についてはゼロからの仮構ではなく、南蘭陵の蕭氏に伝承されてきたものがあつたであろう。すると、蕭瑀世家は最低でも東晋から、齊、梁、陳、隋、唐、唐末五代まで続いた家であり、これだけでも特筆に値するし、その一族は蕭何、蕭望之を先人として仰いできたと言えよう。この系譜を考える時、史実、あるいは生物学的系譜とは別に、精神史的遺伝子の継承というべきものは存在していたと思う。

VI 南蘭陵の蕭氏

南蘭陵の蕭氏が天下に隠れ無きものになるのは、齊王朝を創建した蕭道成による。『南齊書』は先の系譜を次のように続ける。又同じ淮陰令蕭整を受けて、『梁書』は蕭衍につながる系譜を記す。

「裔生淮陰令整，整生即丘令俊，俊生輔国參軍樂子，宋昇明二年九月贈太常生皇考。蕭何居沛，侍中彪免官居東海蘭陵郡中都郷中都里。晋元康元年分東海為蘭陵郡。中朝乱，淮陰令整字公齊過江居晋陵武進郡之東城里。寓居江左者，皆僑置本土，加以南名。於是為南蘭陵。蘭陵人也。

皇考諱承之，字嗣伯。少有大志，才力過人，宗人丹陽尹慕之，北袞州刺史，源之並見知重。初為建威參軍，義熙中，蜀賊譙縱初平，皇考遷揚武將軍，安固汶山太守，善於綏撫。」
 (『南齊書』「本紀第一 高帝上」)

「裔生淮陰令整。整生濟陰太守鎔。鎔生州治中副子。副子生南台治書道賜。道賜生皇考。」
 (『梁書』「本紀第一 武帝上」)

この『南齊書』『梁書』の記述に相応する『新唐書』「宰相世系表」を引けば、次のようである。

「豹生裔，太中大夫。生整，字公齊，晋淮南令，過江居南蘭陵武進東城里。三子：俊，鎔，烈。苞九世孫卓，字子略，洮陽令，女為宋高祖繼母，号皇舅房。卓生源之，字君流，徐袞二州刺史，襲封陽郡侯。生思話，郢州都督，封陽穆侯。六子：惠開，惠明，惠基，惠休，惠朗，惠蒨。惠蒨，齊左戸尚書。生介。(介一族の表を略す。)

齊梁房：整第二子鎔，濟陰太守。生副子，州治中從事。生道賜，宋南台治中侍御史。三子：尚之，順之，崇之。順之字文緯，齊丹陽尹，臨湘懿侯。十子：懿，敷，衍，暢，融，宏，偉，秀，儼，恢。衍，梁高祖武皇帝也，号齊梁房。」
 (『新唐書』「宰相世系表」)

蕭道成，蕭衍の共通の祖としていずれも蕭整を挙げるが、『南齊書』『梁書』がその官職を「淮陰令」とするのに対し、『新唐書』は「淮南令」としている所に少々不安定なものを感じる。しかし、宋以来隋までの南朝諸王朝がいずれも成り上がりの下級軍人によって創建されたときとされる中で、齊の蕭道成の出自は宋，陳，隋とは明らかに違っている。他の三王朝はいずれも漢代にその系譜をつないでいるが，劉裕，陳霸先，楊堅までは誰が誰を生むという記述のみだが，蕭道成の父，蕭承之は東晋義熙の時代には「揚武將軍安固汶山太守」という位を得ている。それから彼の没年元嘉二十四年まで四十年ほど官歴，軍歴を重ね，死後には「散騎常侍，金紫光祿大夫」を追贈されている。その起官の契機となっているのは、『南齊書』と『新唐書』「宰相世系表」を見比べてみると，皇舅房の蕭源之らの引きであり，元嘉十年にその子蕭思話が梁州刺史となると，その下で「横野府司馬，漢中太守」となり，氏討伐に軍功をあげ，次の最終的官位を得ている。勿論，蕭承之の軍事的才能あつてのことだが，皇舅房の引き立てで機会に恵まれ，皇舅房を追う態勢に入れたことが知られる。このように『南齊書』「高祖本紀」にはほぼ一葉にわたって父親の伝が付設されている。

「文帝以平氏之勞，青州欠，將欲授用。彭城王義康秉政，皇考不附，乃轉江夏王司徒中平參軍，竜驤將軍，南泰山太守，封晋興郡五等男，邑三百四十戸。遷右軍將軍。」
 (『南齊書』「本紀第一 高帝上」)

これらから、皇舅房の蕭苞九世の孫、蕭卓からの記述はしっかりしたもので、齊梁房より先行して芽を出していたことがわかる。蕭苞九世の孫蕭卓とは、これを齊梁房に数えれば、齊の高帝蕭道成の祖父の世代、梁の武帝蕭衍の曾祖父の世代に相当する。蕭整の官職の記載にゆれはあるが、洮陽令蕭卓の系譜がはっきりしているところから見て、蕭整以下の記述はほぼ確かなものと認められよう。

皇舅房の蕭卓以下の系譜が確かなものと認められれば、それに記載されていたはずの九代前の蕭苞に遡る系譜も、これを全てゼロからの仮構とはできないであろう。そこに単なる仮構にとどまらない南蘭陵の蕭氏に伝承される事実があったと思う。以上を図示すると、次のようになる。(？は二字名の場合同世代は同じ一字を共有する習慣に合わないため、ここに何らかの乱れがあるだろうとする曹書傑氏の指摘がある。)

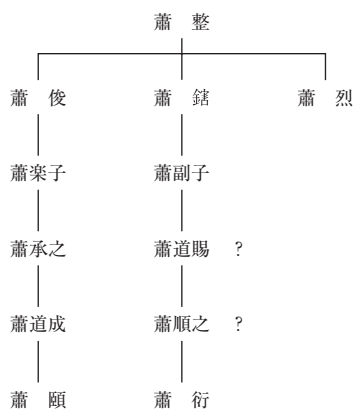


図 4

Ⅶ 南蘭陵の蕭氏に仰がれた蕭何，蕭望之の処世

—私財を洗いざらいなげうつ

南蘭陵齊梁房の蕭氏が蕭何につながることは否定され、漢の蕭望之に連なることも、真偽いずれとも確め難いが、齊梁房の蕭氏がこれを遠祖と仰いだ事実は残る。その精神的遺伝子は、齊梁房の蕭氏の処世を考える時、却って色濃い伝承を感じるところがある。その意味で、よく知られた蕭何，蕭望之の処世に触れておきたい。

「成るもまた蕭何，敗るるもまた蕭何」という人口に膾炙した諺の由来は、漢王朝創建の軍事面での第一の功労者韓信の登用も、その乱の平定もいずれも蕭何によることを言う。このように、共に戦って漢王朝創建に尽しながら、時勢の移り行きの中で、やがては敵となり、身を滅ぼし、家を滅ぼしたものは数多い。漢の高祖劉邦に、王朝創建後、第一の功労者と認められた蕭何とて、しばしば劉邦の嫌疑を引き起し、食客の建言でそれを切り抜けて来た。蕭何の危機として『史記』に記されるのは、三度ある。

一つ目は、漢二年、漢王劉邦は諸侯を率いて楚を撃つが、蕭何は関中を守って、太子に侍して宗廟、社稷、宮室を立て、県邑を設けて内政に専念し、糧食の輸送、兵員の補充につとめ、しばしば兵を失って遁走した劉邦を助けた。漢三年になると、劉邦からしばしばねぎらいの使者が来るようになる。鮑生なる者が、頻繁な使者の来訪が、外に命を的に戦う劉邦の疑心であることを見抜き、「子孫昆弟の兵に勝える者」を尽く軍に差し出すことを勧め、これに従って劉邦の疑いを晴らした。

二つ目は、漢十一年、劉邦は陳稀の叛乱を討伐するため邯鄲に出ていた。その留守に蕭何は韓信の謀叛を察して、呂后と計って韓信を誅殺した。劉邦は使者をやって、丞相を相国とし、「封五千戸、令卒五百人を益し、一都尉を護衛につけた」。元の秦の東陵公召平がこれを禍の始まりとし、護衛をつけたのは疑心の表れと見抜き、恩賞を返上し、家の私財を全て差し出して軍を助けるよう勧め、これに従った。

三つ目は、漢十二年、劉邦は鯨布の叛乱を撃つため外にあり、今回も何度も使者を派遣して蕭何の様子を尋ね、これまた客の指摘で、有能で民心を得ている故に招いた疑心と知った。今回も客の勧めに従って、多くの田地を極端な安値で掛け買いし、支払いを引き延ばして、わざと民の不評を買った。それを聞いた劉邦は大喜びして疑いを解いた。ただ、今回は、帰還して道に蕭何を非難する民の上書を受け、上機嫌で民に謝るよう指示した劉邦に、事のついでに宮中の上林苑の不要地を民に開放して、長安の土地不足を解消するよう献策してしまった。これが劉邦の不興を買い、商人から賄賂を受けて皇帝の園地を削ろうとしたとして、今度だけは獄に繋がれてしまった。王衛尉なる者の取り成しで、疑いを晴らしたが、王衛尉が先の二回の例を引いて、献策の趣旨は宰相の任務にかなうものであり、一族の成人を挙げて軍に出し、私財を全て出して軍資に充てるほどの人が、商人の賄賂など受け取りましようか、という説得が理にかなっていたからにはほかならない。

ここに絶対権力を持つ皇帝に仕える困難がよく出ている。その後の1100余年をつなぐ家系となることは愚か、我が身一つを全うすることすら、危ういことであった。蕭何がその身を全う出来た原因として、食客の建言とはいえ、肝腎要の時に一族の成人を全て軍に差し出し、私財をなげうって軍を支援するという思い切ったことが出来た人物であるということは、特筆大書してよいだろう。こういう所に持続の遺伝子の最たるものがあるだろう。

蕭瑀も隋の崩壊という時局の中で、同様の思い切りよさ、無欲ぶりを発揮している。隋の大業十一年（BC 615年）、突厥の数十万の騎兵に囲まれた隋の煬帝は、蕭瑀の献策を入れて遼東征伐停止を宣言して、兵卒を安堵させ当面の敵突厥に専心することにした。突厥に嫁いでいた義成公主の協力もあり、援軍も到着して、始畢可汗が囲みをといて危機が去ると、蕭瑀の遼東征伐停止の建言を憎んで、内史侍郎を罷免して河池郡（今の陝西鳳凰の東北鳳州鎮）太守に降格した。蕭瑀はこの地で隋末の乱を迎えるが、まず、在地の山民の叛乱を平定し、その財物を少しも私せず、全て功ある将士に与え、命を投げ出して仕える部下の忠誠をかり得た。又蘭州を占拠し、隴西諸州を下して10余万の兵力を有した「秦」の薛举の子、薛仁に攻められた時は、私財を投じて将士を励まし、これを撃退し、隋末の大乱の中で郡内の平穏を保った。こうして長安に入った李淵の招聘を迎えるが、この時も、全ての家産を土地の衆人に与え、河池の兵馬を全て李世民に委ね、身一つで家人を連れて長安に赴いた。これこそ蕭何の精神的遺伝子そのものであろう。著者は、伝世の秘訣の三に清廉を上げているが、これは単なる清廉と

か、無欲の範囲を超えて示された私財に恋々としなない思い切りのよさである。こういう思い切りの良い無欲さというものは、記憶の中に典型が刻みこまれていない限り発現しにくいものではなからうか。

劉邦が項羽に先んじて咸陽に入った時、諸将は宝物庫に殺到したが、蕭何は先ず、秦の律令図書を集めたという。これが後々漢王の天下統治に大いに役立ったことを司馬遷は指摘する¹⁶。秦の時に刀筆の吏、書記役として出発した彼には、統治における文献の重要性が解っていたということであろう。これは仰がれて後の文化尊崇の意識ともなろう。

一出世を棒に振っても正論を貫く

蕭望之は先に触れたように、学問の名声によって官に召された。先ず大將軍霍光に召されたが、刺客に用心していた霍光に拝謁するには、身体検査をされ、武器を取り上げた上で、役人二人が両脇を挟んで付き添った。これを拒否して争っていると、霍光が聞きつけて、役人にまといつかせないで、自由にさせた。蕭望之は霍光にこれは人材を招こうとする者のとる道ではないこと、周公が食事の途中でも、沐浴の途中でもそれを中断して士に会った精神に反するものとした。これによって登用は見送られ、同時に招かれた者の後塵を拝することになったのが、甚だ個性的な彼の官途の始まりである。

蕭望之は、孝元帝の即位の始め、讒言によって、「廷尉におくる」という用語の意を知らぬ皇帝の不用意な許可で獄につながれた。これが彼の最後のきっかけとなる。後にそれに気付いた皇帝によって釈放され、彼を頼みとして丞相としようとしていた時、蕭望之の子蕭伋が上書して先の事件の無罪を控訴した。これを逆手にとった讒言者は無辜の詩を引用して息子に上訴させたのは、不敬であるとして、獄につないで懲らしめる必要ありとした。今度も、言葉による軽犯罪であるからすぐ片付きますという言葉に騙され、孝元帝は逮捕を許可してしまう。こうして捕り手が蕭望之の邸に向かうと、これは天子の御意ではないと止める妻の言葉をよそに、「吾嘗って位を将相に備え、年六十を踰ゆ。老いて牢獄に入り、苟も生活を求むるは、亦鄙しからざるや！」と毒を仰いだ。これが讒言者の思惑だったのだが、これも又、屈辱にたえられない彼の剛直の一面であろう。その出仕の始めと人生の終りにこの剛直がある。

またその子育が茂陵県の令の時、官吏の試験があり、彼は第六で合格した。『漢書』小竹文夫訳（筑摩文庫）につけた注釈によれば、「中の下の成績で、どうにか前（現）官を守るもの。」とある。そんな成績は露知らず、しんがりで問責を受けた漆県の令の為に弁明して、他人の心配ができる柄かと右扶風の太守を怒らせた。その結果、育は後曹に呼び出されたが、後曹とはこれも小竹注に、「罪科を掌る法吏およびその役所で、賊曹、決曹など後曹に属す。」とある通り、不名誉なことであった。「蕭育は杜陵の男子なり、何ぞ曹に詣らんや！」と言ってこれを拒否したのは、官位を捨てる覚悟であった。

こういう逸話は直ちにリゴリスチックなまでに「正直」で、しばしば李世民を困惑させた蕭瑀を思い浮かばせる。『一門九相 蕭瑀世家』第五章は「貞観朝に蕭瑀五たび宰相を罷免される」という題であるが、この浮沈は彼の「鯁直」とか、「正直」が招いた側面が強い。一例を挙げれば、二度目の失脚は、莒国公唐儉が突厥に使いする際、当時突厥に身を寄せ、唐に帰れなかった姉、蕭皇后に帰国を促す家書を託したことによる。これを、私信を亡国隋の皇后

に通じ、国体を捨てて私情を懐くもの、その真意は測り知れないと告発する者があった。一通の家書を大げさに扱うべきではないとも思っていた太宗に召されたが、事情の説明をするどころか、腹立ちにまかせて一言も発しないばかりか、最後には一言こう言い捨てた。「臣の心跡は只唐僉の帰朝の日を待って、天下に大いに明らかと為りましょう！今弁解しても無益です。」^⑦

彼の頑固が始まったことを見た太宗は、沈黙をもって対抗したことに腹を立て、これでは他の宰相と共にことを進め難いと彼を罷免した。あらかた事情は理解しているはずの太宗がなぜ言い訳などさせるのかという思いであったろうが、これがたびたび史書の指摘する彼の「鯁直」の性である。こうした処世は血のつながりがもたらす影響というよりは、尊敬し振り仰いできた記憶が積み重なって生み出すものではなかろうか。

VIII 齊梁房の蕭氏の文

齊、梁二つの王朝を創建し、梁滅亡後も、西魏、北周の占領下同様の状態ではあるが、蕭察以下三代にわたって江陵に後梁小王朝を保った。この蕭察の子、後梁二代目の帝、蕭巋の子が、隋の煬帝に嫁した蕭皇后であり、その弟が蕭瑀である。こうしてこの家系は五代後梁の蕭頃まで九人の宰相を出し続けるのである。少なくとも東晋以来、官位に着く者を出し続け、齊、梁二王朝を建て、ほぼ600年にわたって世系が乱れない。

これを蕭何、蕭望之につなげずとも、これは一個の奇跡である。『一門九相 蕭瑀世家』の序文はこの蕭氏一族が久しく衰えなかった理由を、「そこには社会情勢、時局の原因があるが、しかし主要なものは家族自身が決定した。」として、次の三条を挙げている。

- 一、文化をもって家を伝えたこと。
- 二、忠孝をもって家を伝えたこと。
- 三、清廉をもって家を伝えたこと。

これらの指摘は関係正史を涉猟して記述された『一門九相 蕭瑀世家』を読めば納得されることだが、この一族がいかに文事に優れていたかという様相を以下『南齊書』『梁書』の記事を確認しておきたい。

—齊の高帝蕭道成にはすでに文の伝統の萌芽が見えていた

『南齊書』「本紀第一 高帝」には、その父蕭承之の伝が冠されており、齊の高帝蕭道成の劉裕、陳霸先、楊堅と違う所は、皇舅房に父を引き立てた丹陽尹蕭摹之や北兗州刺史蕭源之がいて、その父が低いながらも晋興県男の爵位を得て彼の出発の地ならしが出来ていたことである。従って「儒士雷次宗学を鶏籠山に立つ。太祖年十三業を受け、礼と左氏春秋を治む。」と、学びの道をたどることができた。翌元嘉十七年（AC 427年）には、十四歳で父に従って従軍し江州に赴いているから、先ず学問というよりは文武並行で学ぶことが肝腎であったであろう。彼の王朝創建は軍略、武勇に導かれたものであり、格別の文才を歌われるほどではなかったが、文事に目を向け、国家にとっての教学の重要性を理解した帝王であった。即位の年にすでに詩宴のことが見えるのは、梁のみならず、齊にも其の文事尊崇はすでに現れていたことを示す。建元元年九月には宣武殿に宴会を開き、「詔して諸王公以下に詩を賦せしむ。」と見え、

同二年三月には「車駕して楽遊園に幸し、王公以下を宴して詩を賦せしむ。」と見える。四年正月には文教の備えを図り、詔して「数学を修建し、儒官を精選し、広く国胄を延げ。」と命じている。その年三月には死期を悟って、司徒褚淵と左僕射王儉を召して次のように詔している。実質的には遺言であろう。

「吾は本布衣の素族にして、念此れに至らず。時の到るに籍るに因りて、遂に大業を隆せり。風道沾被し、昇平期すべし。疾弥留に遭い、大漸に至る。公等太子を奉じて吾に事えるが如くせよ。遠きに柔らかに邇きに能くし、内外に和を緝げ。当に太子をして親戚に敦穆ならしむべし。賢才に委任し、節儉を崇尚し、簡恵を弘宣せば、則ち天下の理尽されん。死生命有り、夫れ復た何をか言わん。」

これに続けて、『南齊書』は彼の人柄を回顧する。二つを合わせ読めば、正に彼の言う通り何の名門を誇る家柄でもないが、曹書傑氏の言う。文を尊び、忠孝親和で内外を治め、節儉を旨とする王者の心意は、しみじみと伝わってくる。

「上少くして沈深にして大量有り、寛嚴清儉、喜怒に色無し。広く経史に涉り、善く文を属す。草隸に工みに、弈棋は二品なり。夷險を経綸すと雖も、素業を廃さず。諫に従い謀を察し、威の重きを以って衆を得る。」

実質的寒門から身を起こした者にとって、布衣の素族というのがふさわしいのだろうが、のし上がる下地は東晋の時代にしかれ、文業もそれなりに積んだ彼に、本紀の賛では、「文芸躬に在り、芳塵淵塞す。」と言っている。一般史書に成り上がりとして記述され、その自覚においても、「布衣の素族」に違いないが、そこには武力、軍略のみでのし上がって来た者とは違う、後に南蘭陵の蕭氏の文の伝統と称されるものの源流が見てとれる。

梁の蕭衍の父、蕭順之はこの蕭道成に側近く仕え、徐州刺史薛索兒が向けた刺客から守ったのも彼であるし、蕭道成が宋の順帝を立てた時の謀も彼の献策であった。その蕭順之を呉郡の張緒は常に「文武兼ね備え、徳も在り行いもある者として、私は蕭順之を最も尊敬している。」¹⁸と称していた。すると梁一代の文運はすでに齊の蕭道成の周辺で醸成されていたと言ってもよいであろう。

齊の武帝蕭贖の子、竟陵王蕭子良については、文学史にも竟陵の八友の項目が立てられ、建安文壇にも比せられているが、彼の文名が記述されるのは、建元四年と五年の条（『南齊書』「列伝二十一・武十七王」）である。

「四年、進号車騎將軍。子良少有清尚、礼才好士。居不疑之地、傾賓客。天下才学、皆遊集焉。善立勝事、夏月客至、為設瓜飲甘果。著之文教、士子文章、及朝貴辞翰、皆発教撰録。」

「五年：：移居鷄籠山西邸、集学士抄五經百家、依皇覽例。為四部要略千卷。招致名僧、講語仏法、造経唄新声、道俗之盛、江左未有也。」

学問、文学を好み、天下の才学の士を集め、その文章を記録に留めた。第二条が竟陵の八友の集った鷄籠山の西邸である。これを『梁書』「本紀 武帝上」には次のように記録する。

「竟陵王子良開西邸招文学。高祖与沈約謝朓王融蕭琛范雲任昉陸倕等並遊焉。号八友。融俊爽，識鑒過人。尤敬異高祖。每謂所親曰，宰制天下，必在此人。」

西邸の集いに加わった蕭衍に触れて八友の名が連ねられる。「武帝本紀」はこれより先、その誕生の帝王誕生伝説を記したあと、「武帝長ずるに及んで、博学多通、籌略を好み、文武の才幹有り。時流の名輩、咸焉を推許す。」とあるが、彼が鍛えられたり評価される場が斉の建元五年に用意されていた。この竟陵王子良の伝の締めくくりには、意外なことに「著す所の著内外の文筆数十卷、文采無しと雖も、多くは是勸戒なり。」とあるから、彼本人にとっての文学とは経術に傾くものであり、五経百家を抄出して魏の『皇覽』にならって『四部要略』を編集しているところ等からして、王化の基盤を整備する意識が強かったろう。

他に「列伝二十一 武十七王」に斉の武帝蕭頤の子に文名ある者を拾うと、晋安王蕭子懋に武帝蕭頤が与えた言葉、「汝常に書を以て読みて心に在れば、足りて深く欣びと為すを知る。子懋に杜預手づから定むる所の左伝、及び古今の善言を賜う。」とあり、随郡王子隆に「文才有り：：文集世に行わる」とある。又予章文献王蕭暉の第二子、蕭子恪は竟陵王蕭子良の「高松賦」に和し、これは永明年間のことである。その蕭子恪兄弟は「子恪兄弟十六人、並びに梁に仕う。文学有る者、子恪、子質、子顕、子雲、子暉五人」（『梁書』列伝二十九）とあって、この蕭子顕が『南齊書』の撰者である。

こんな記事を拾いながら、南蘭陵蕭氏の文業が梁の武帝蕭衍、『文選』編者の昭明太子蕭統、簡文帝蕭綱を待たなくとも、永明年間にはすでに成立していたことを素描しようとしていたが、学生時代に『詩集伝』の手ほどきを受けた網笈次先生にこの時代の専論『中国中世文学の研究——南齊永明時代を中心として』のあることを思い出し、それを繰ると、竟陵王蕭子良のサロンについては勿論、「上篇 第一章永明文学の擁護者 一 南齊高帝蕭道成 二 南齊武帝蕭頤」以下「永明文学の作者群 上・下」として「一 南齊文惠太子蕭長懋を中心とする作者群、二 南齊随群王蕭子隆を中心とする作者群」について総論されていた。

問題意識のない読書とは情けないもので、齊梁の文学を綺靡退廃の文学としか意識しない当時の私には、師の研究は滲みこんでいなかった。まず、『一門九相 蕭瑀世家』の翻訳、出典調べからはじめてここまで来て見れば、南蘭陵の蕭氏の家系が蕭何に遡らぬことなども、『南史』、『十七史商榷』「齊梁書叙蕭氏譜系，付会錯謬正多。」（清・王鳴盛『十七史商榷』卷五十五「蕭氏世系」）を引いて、すでに三行ほどで簡潔に述べられていた。

この記述が頭に残っていれば始まらなかつただろうこの一篇だが、これを失念していたために普通はやらないあれこれをたどって、顔師古、司馬光説の動かないこと、また、それでも否定されたものの一部には南蘭陵蕭氏に事実として伝承されていたものがあり、それが彼等の精神史的遺伝子となってきたことを指摘した。当初の予定ではもう少し齊梁房の蕭氏の文——北魏の後ろ盾、事実上は占領下に後梁小王朝を保った蕭察の「愍時賦」や、隋の亡国を予感して蕭瑀の姉蕭皇后が記した「述志賦」——などについて触れ、それと蕭瑀以下の精神の有り様

とを比較するつもりであった。蕭瑀以下については、『一門九相 蕭瑀世家』にまかせることとし、これについて更に述べるには、師の『中国中世文学研究 一南齊永明時代を中心として』が示しているものを勉強し直してからのこととしたい。

注 釈

- ① 『一門九相 蕭瑀世家』（曹書傑著）吉林人民出版社 1997年
- ② 蕭氏出自姬姓，帝嚳之後。商帝乙庶子微子，周封為宋公，弟仲衍八世孫戴公生子衍，字樂父，裔孫大心平南宮長万有功，封於蕭，以為付庸，今徐州蕭縣是也，子孫因以為氏。其後楚滅蕭，裔孫不疑為楚相春申君上客，世居豐沛。漢丞相鄧文終侯何，二子，遺，則。（『新唐書』卷七十一下・宰相世系一下）
- ③ 39「宋微子之後，支孫封於蕭，蕭叔大心子孫有功，因邑命氏焉。代居豐沛，至不疑，為楚申君客。秘笈新書。
A [岑校] 至不疑為楚申君之客 此姓全是洪氏秘笈新書所補。按新表七一下有云：「裔孫不疑，為楚相春申君上客。通志略同。秘笈祇稱「申君」，應奪「春」字。類稿十八引作「為楚春申君客」
「卷五整理記」39按秦嘉謨輯補本作「蕭氏，宋樂叔以討南宮万，周封為付庸之國，因以為氏。」
- ④ (孝惠)三年，哀侯祿元年。(高后)二年，懿侯同元年。同祿弟。(孝文)十三年，筑陽(19)元年，同有罪，封何小子延，元年。後四年，煬侯遺元年。後五年侯則元年。(孝景)有罪。武陽(7)前二年，封煬侯弟幽侯嘉，元年。中二年侯勝元年。元朔二年侯勝坐不敬絕。鄧(3)元狩三年，封何[曾]孫恭侯慶元年。元狩六年，侯壽成元年。元封四年壽成為太常，犧牲不如令，國除。（『史記』「高祖功臣侯表」）
- ⑤ 孝景二年，何薨。諡曰文終侯。子祿嗣。薨。無子。高后廼封何夫人同為鄧侯。小子延為筑陽侯。孝文元年罷同。更封延為鄧侯。薨。子遺嗣。薨。無子。文帝復以遺弟則嗣。有罪免。景帝二年，制詔御史，故相國蕭何，高皇帝大功臣。所與為天下也。今其祀絕。朕甚憐之。其以武陽縣戶二千，封何孫嘉為列侯。嘉則弟也。薨。子勝嗣。後有罪免。武帝元狩中，復下詔御史，以鄧戶二千四百，封何曾孫慶為鄧侯。布告天下，令明知朕報蕭相國德也。慶則子也。薨。子壽成嗣。坐為太常犧牲瘦免。（『漢書』「蕭曹世家」）
- ⑥ 宣帝時，更詔丞相御史，求問蕭相國後在者，得玄孫孫建等十二人。復下詔，以鄧戶二千，封建世為鄧侯，佗子至孫獲，坐使奴殺人，減死論。成帝時，復封玄孫之子南嶽長喜為鄧侯。佗子至曾孫。王莽敗，乃絕。（『漢書』「蕭曹世家」）
- ⑦ 師古曰，近代譜牒，妄相託付。乃云蕭望之蕭何後，追次昭穆。流俗學者，共祖述焉。但鄧侯漢室宗臣，功高，位重。子孫胤緒具詳表傳。長倩鉅儒達學，名節並隆。博覽古今，能言其祖。市朝未變，年載非遙，長老所傳，耳目相接。若其承何後，史臣寧得弗詳。漢書既不叙論，後人焉所取信。不然之事，斷可識矣。（『漢書』「蕭望之列傳 第四十八」顏師古注）
- ⑧ 自隋唐而上，官有簿狀，家有譜系。官之選舉，必由於簿狀，家之婚姻，必由譜系。歷代並有因譜局置郎，令史以掌之。仍用博通古今之儒，知撰譜事。凡百官族姓之家狀者，則上之官，為考定詳實，藏於秘閣，副在左戶。一中略一唐太宗命諸儒撰氏族志一百卷。『通志』「氏族略第一・氏族序」
- ⑨ 鮑生謂丞相曰，王暴衣露蓋，數使使勞苦君者，有疑君心也。為君計，莫若遣君子孫昆弟能勝兵者，悉詣軍所。上必益信君。（『史記』「蕭相國世家 第二十三」）
- ⑩ 家至吏二千石者六七人。（『漢書』列傳第四十八「蕭望之傳」）
- ⑪ 贊曰，梁蕭氏興江左，實有功在民。厥終無大惡，以寢微而亡。故余祉及其後裔。自瑀逮邁，凡八葉，宰相名德相望，與唐盛衰。世家之盛，古未有也。（『新唐書』列傳第二十六「蕭瑀列傳」）
- ⑫ 『四庫全書總目提要』に『新唐書』の各卷の署名を論じた所に次の記述があるから，「宰相世系表」の實際の製作者は呂夏卿である。「又宋史呂夏卿佗稱宰相世系表夏卿所撰，而書中亦題修名，則猶仍以高官者為主。」（史部 正史類二）
- ⑬ 中国人物叢書『隋の煬帝』宮崎市定著 人物往来社 昭和四十年 36ページ
- ⑭ 中国の歴史05『中華の崩壊と拡大 魏晉南北朝』川本芳明著 講談社 2005年 152ページ-154ページ
- ⑮ 中国の歴史05『中華の崩壊と拡大 魏晉南北朝』川本芳明著 講談社 2005年 36ページ
- ⑯ 沛公至咸陽，諸將皆爭走金帛財物之府分之。何獨先入収秦丞相御史律令圖書藏之。沛公為漢王以何為丞相。項王與諸侯屠燒咸陽，而去。漢王所以具知天下阨塞，戶口多少強弱之処，民所疾苦者，以何具得秦圖書也。（『史記』「蕭相國世家 第二十三」）
- ⑰ 『一門九相 蕭瑀世家』147ページ
- ⑱ 「吳郡張緒經常稱道：“文武兼備，有德有行，我最敬蕭瑀蕭順之。”」『一門九相 蕭瑀世家』41ページ